

千葉大学とドイツのライプツィヒ大学とは「大学間交流協定」を結んでおり、相互に学生が短期・長期に留学しています。2023年11月28日から30日まで、千葉大学大学院医学薬学府の学生たちとともに訪れ、「日本とドイツの医学の歴史」をテーマにした日独シンポジウムと、「環境、気候変動と健康」をテーマにした集中講義を開催しましたので、報告します。

ライプツィヒ大学は、明治時代の文豪、森鷗外^{おうがい}が1884年から4年間ドイツに西洋医学を学ぶために留学した際、最初の1年半を過ごしたところです。鷗外の「ドイツ日記」を読むと、当時の日本の若者たちが苦労しながらも留学生活を楽しんでいた様子が生き生きと描かれており、私自身、自分が25歳の時にカナダに留学した当時のことと重ね合わせて読むと非常に興味深いのです。若者が海外に出なくなった、と言われますが、ぜひ今の若者たちにも海外に羽ばたいていろいろな経験を積み重ねてほしい、と願っています。

さて、ライプツィヒ大学は600年の歴史のある大学で、ドイツの文豪、ゲーテも通って法律を学んだそうです。アーカイブ（記録）部があり、在籍した学生たちの記録も残されています。残念ながら、森鷗外が学んだという記録を発見することはできませんでした。アーカイブの記録に出てくるのは、正式に学位取得を目指す長期の留学をしていた学生の記録で、鷗外のように日本陸軍軍医部の命令でドイツ国内の数か所の大学医学部を1-2年ごとに移動していた学生たちの記録は残されていないのだそうです。しかし、せっかくのご縁なので、ぜひとも同大学で日独シンポジウムおよび集中講義を開催しましょう、ということになりました。

日独シンポジウム（11月28日）

日独シンポジウムは、同大学アーカイブ部の入っている建物の2階の会議室で開催されました（画像1）。この場所は、偶然にも森鷗外の下宿のあった場所（1 Tal Strasse）から徒歩3分くらいのところです。（画像2）



画像1：日独シンポジウムのもよう



画像2：鷗外の下宿跡（1 Tal Strasse）

日独シンポジウムでは、まずゲッティンゲン大学で漢方と西洋医学の融合を研究しているケニー・クフタ先生のお話がありました。私の母は肺腺癌で死にましたが、肺の切除手術後の抗がん剤治療開始後、強い薬の副作用で口内炎がたたくさんでき、水を飲むこともできませんでした。しかし、私が高血圧の治療のために服用している漢方薬は、口内炎を予防する効果があるのを知っていたので、母の主治医にお願いしてその漢方薬（柴胡加竜骨牡蠣湯）を出してもらったところ、口内炎が少なくなり、母は水を飲むことができるようになり、その後食事もできるようになりました。その経験があるので、私は漢方薬と西洋薬が足りないところを補い合えば、患者さんの生活の質が向上する可能性がある、と感じています。クフタ先生のお話は大変興味深く、ぜひとも多くの医学関係の方々に取り組んでみてほしい、と思いました。

次に、ライプツィヒ大学のシラー教授より、「日本とドイツとの関係の歴史」についてのお話がありました。シラー教授は同大学の日本学科の先生で、明治初期に岩倉具視が団長になってヨーロッパ各地を訪問した「岩倉使節団」についてお話されたほか、第一次世界大戦後にドイツ人捕虜が日本各地の捕虜収容所に収容されていた当時、収容所周囲の住民と捕虜たちが交流していたことなどを美しい画像とともに説明してくれました。この当時、ドイツ人が日本人にドイツ料理やクラシック音楽を教えたりしていたこと、神戸のユーハイムは捕虜だった男性が日本に残ってバウムクーヘンのお店を開いたことから始まったことなど、このままの日独関係だったら良かったのに、と思ういくつかのエピソードを知りました。第二次世界大戦が悔やまれてなりません。

そして、同大学アーカイブ部のイェンス・ブレヒャー先生が、同大学の日本人留学生のさまざまなエピソードを紹介してくれました。同大学は大きな総合大学で、音楽もとても有名です。早世の天才音楽家、滝廉太郎もライプツィヒ大学に留学していましたが、残念ながら留学中に結核を発症し帰国することになってしまいました。ブレヒャー先生のお話の中に、ドイツの医学部に留学した日本人の中にただ一人女性がいた、というお話が面白かったです。この方は、熊本県出身の宇良田唯さんで、子どものころから向学心が高く、良い縁談があったのですが結婚後に「どうしても勉強して医者になりたい」と離縁して東京に出、医者になるべく猛勉強します。当時まだ医学部では女性を受け入れていなかったため大変苦労しますが、努力を惜しまず医師になることができました。それだけでは終わらず、ドイツ留学をしてマールブルク大学医学部で眼科のほか衛生学、病理学、産婦人科、内科、外科など全科目を学んだというのですからすごい女性です。同大学でも当時はまだ女性は受け入れられておらず、聴講生という立場だったので、すべての科目を学ぶ必要はなかったのですが、向学心が人並外れて高かったようで、すべての科目を習得したかったようです。帰国後は眼科の病院を日本で開業し、さらに中国に総合病院を開いて中国人、日本人の区別なく患者を診察したとのことで、まったく超人と言うべき偉人です。これほどの方が、日本ではほとんど知られていないのが残念です。NHKの連続テレビ小説や大河ドラマなどで取り上げてくれないのでしょうか。

ブレヒャー先生の後、私が、日本が明治維新後に近代医学をドイツから輸入した歴史の話しを、森鷗外の業績をからめながら話しました。江戸時代末期に長崎で医学校「鳴滝塾」を開いたのはドイツ人医師シーボルトです。日本各地から、西洋の進んだ医学が学べる、ということで多くの若者たちが鳴滝塾に集まりました。そして、そこで学んだ学生たちが今度は各地に医学塾を開き、日本の医師たちに西洋医学を教えていたのです。その一つが順天堂（現在の順天堂大学）です。順天堂の学祖、佐藤泰然は、1835年から3年間、鳴滝塾でシーボルトから西洋医学を学び、1838年に東京の日本橋で西洋医学塾を開きました。しかし攘夷・洋学排斥の風潮が高まって身の危険を感じたため、現在の千葉県佐倉市に「佐倉順天堂」を開き、全国から塾生を受け入れて西洋医学を教えていました。集まった学生の中に、森鷗外の父親、森静泰（のち、改名して静男）もいたのです。幕末の世相のあわたしい当時でも、西洋の進んだ医学を学びたいという医師たちの情熱は抑えがたかったと思われま

す。さて、時代が明治へと変わり、アジアの周辺国が西洋諸国の植民地になっていることに気づいた日本では、それまでの攘夷の雰囲気は吹き飛んで、今度は「脱亜入欧」を急ぎます。そして医学についてはドイツに学ぶこととし、新政府は多くの若者を医学留学のために派遣しました。鷗外もドイツ留学を熱望し、1884年、22歳の時に陸軍軍医部からの命令でドイツに留学します。正確には、1884年8月に横浜港を出発し、1888年9月に横浜港に戻りました。目的は、陸軍の兵食と衛生学を学ぶことでした。

まず、ライプツィヒ大学医学部で当時最先端の医学であった衛生学と近代医学研究の基礎をフランツ・ホフマン教授の教室で学び、約1年半後にミュンヘンに移動して「環境医学の父」とのちに呼ばれることになるマックス・ペッテンコーファー教授に師事します。鷗外はペッテンコーファーのことをとても尊敬し、自分の最初の孫に「真草」と名付けたほどです。ヨーロッパの人たちが日本のことをまったく知らず、誤解されていることを知った鷗外は、ミュンヘンで日本の家屋の造りについて紹介する「日本家屋論」を執筆します。また、有名な「ビールの利尿作用について」の論文のほか、「アグロステンマ・ギダゴの種子の有毒性とその解毒について」という論文を発表します。アグロステンマ・ギダゴとは、麦畑に生える雑草で種に毒があります。これを間違えて食べると死ぬこともあるそうで、当時の人たちはこの種が誤って小麦に混入しないように気をつけていたのです。鷗外は、この種を火であぶると無毒化する上に、食味も良く、栄養価も高くなることを発見し、無駄にせず、非常時の食糧として活用することを論文で提案しています。

ミュンヘンでの1年の滞在の後、ベルリンに移動しここでドイツ留学最後の1年余りを過ごします。ベルリンでは、留学の主目的の一つであった、陸軍の兵食について論じた「日本兵食論」を発表しました。また、細菌学者として著名なロベルト・コッホに師事し、ベルリンの下水中の細菌を顕微鏡で調べて「暗渠水中の病原的有機小体説」という論文を発表します。

ドイツから帰国後、鷗外は日本社会に衛生学、公衆衛生学の考え方を広めようと積極的な啓発活動に励みます。自分の職場である陸軍内部はもちろんのこと、医学教育に使用できるよう初の日本語での公衆衛生学の教科書を出版し（それまでドイツ語しかなかった）、さらに社会の衛生は家庭から、と考えて女学生向けの衛生学の本（「衛生学大意」（画像 3））も出版します。現在、日本はとても清潔で、国民の間に「清潔が大事」という考えが隅々まで浸透しています。たとえば日本のトイレは世界一美しく、清潔だといつも感心します。これは、鷗外をはじめとした当時の医学関係者の努力のおかげです。



画像 3：「衛生学大意」の表紙（東京都文京区 森鷗外記念館所蔵）

鷗外がドイツから帰国したのは 1888 年 9 月でした。そして翌年（明治 22 年）の 2 月に大日本帝国憲法が公布されます。早くも翌月、鷗外は「衛生新誌」という雑誌を発行し、その巻頭言で以下のように記します。「日本はついに憲法を持った。人間に例えれば成人し、親の庇護を離れる時期に来たということだ。国のすべての事業の基本は国民の健康である。国民が健康でなければ農業を発展させることもできず強い軍隊を持つこともできない。国民の健康は政府の最も大きな目標の一つなのだから、市民は政府に向かって『我々を健康にせよ』と求める権利があり、政府には市民に向かって『あなたたちを健康にします』と誓う責任がある」。

江戸時代から明治になってまだ 22 年しかたっていなかった当時、お上^{かみ}に向かって「我々を健康にせよ、と求める権利がある」と言われて、市民はどのように受け止めたのでしょうか。混乱した人も多かったでしょうし、行動に移せる人は少なかったと想像されます。しかし、鷗外は「上から言われてただ従うのは子どものすることである。成熟した日本の市民は自ら衛生学を学び、実践し、必要な対応を政府に求めていかなければならない」と書いているのです。これは画期的なことだったでしょう。

1894 年 7 月から 1895 年 4 月までの日清戦争では、兵士の死者数は約 13,500 人で、その内 9 割が戦病死、中でもコレラなどの感染症がほとんどでした。1904 年 2 月から 1905 年 9 月までの日露戦争での戦死者は 84,000 人で、約半数が病死でした。鷗外は陸軍軍医として両方の戦争に従軍し、多くの死者、負傷者の名前と所属部隊を記録する辛い仕事を毎日してい

ました。両戦争終了後の1907年、陸軍軍医の最高位にあたる「軍医総監」に就任した鷗外が最初にしたことは、チフスの予防接種の陸軍内での実施でした。当時すでにワクチンは開発されていましたが、「ワクチンを打つと死ぬ」、などのうわさが広がり接種する人は少なかったのです。鷗外は、ただワクチンを接種させると混乱すると思ったのか、ポケットサイズの「腸チフス予防接種」と「腸チフス予防接種の事績および学理」というパンフレットを作成し、少尉以上のすべての兵士に配布しました。ワクチンとはなにか、なぜ腸チフスを予防できるのかを分かりやすく説明し、接種を促したのです。この工夫により陸軍内部での接種は広がり、腸チフスによる死者は激減したのです。

現代においては、鷗外は医学者としてよりも作家としての業績の方が知られています。「舞姫」、「最後の一句」、「高瀬舟」などが教科書に掲載されている影響もあるでしょう。しかし、私は文学以外の業績の方が計り知れないほど大きいと感じています。ベルリンには「Mori Ogai Gedenkstätte（森鷗外記念館）」がかつての下宿のあった建物内に再現されていますので、機会があればぜひ訪れてみてほしいと思います。日本国内では、東京都文京区に区立森鷗外記念館が、出身地島根県津和野町に森鷗外記念館があります。

さて、講演会の後は休憩をはさんでパネルディスカッションを開催しました。日本と西洋医学の融合は、患者さんの生活の質を高めるためにもっともっと進めていただきたいものです。千葉大学から参加した大学院生の多くが中国からの留学生でしたので、漢方については日本人学生よりも詳しく、ぜひとも中国の漢方の研究者にも西洋医学との融合について興味を持ってほしいと思いました。

シンポジウムの最後は、ライプツィヒ大学医学部内の「シミュレーションクリニック」の見学です。これは、人体モデルなどを活用して医学生が診察や治療のシミュレーションをしながら学ぶための施設です。ここでは、ボランティアが患者役になって医師の問診の訓練も行います。人体モデルなどの装置が日本製だったのが驚きでした。（画像4）



画像4：シミュレーションクリニックにて

日独共催集中講義「環境、気候変動と健康」（11月29日）

ライプツィヒ第2日目は、ライプツィヒ大学医学部内の講義室にてハイブリッド共催集中講義「Environment, Climate Change and Health（環境、気候変動と健康）」を開催しました（画像5）。千葉大学からも多くの学生たちが、時差があるにもかかわらずオンラインで参加してくれました。集中講義は、ライプツィヒ大学、ベルリンのシャリテ医科大学と千葉大学の三大学共催です。



画像5：日独共催集中講義のよう

セッション1は、「環境保健の背景」というテーマです。

ライプツィヒ側からは、ヘルムホルツ環境研究センター（UFZ）のニコール・マイヤー・環境免疫学部研究員が「環境と健康」というテーマで生活の中にあふれる化学物質、中でも内分泌かく乱物質（環境ホルモン）による影響について講義しました。お話の中で私が「これは新しい！」と思ったのが「6Rs」という言葉でした。リデュース、リユーズ、リサイクルという「3Rs」は皆さんご存じだと思います。「6Rs」とは、さらに「Rethink（よく考えて）」、「Refuse（断って）」、「Repair（修理して）」の3つのRが加わった取り組みです。私たちは、何気なく物を買ったり、無料でもらえる物を受け取ってしまったり、傷ついたり壊れたりした物を捨ててしまいがちです。しかし、まずその物が本当に必要かよく考え、不要な物は受け取らない、買わない、そして今持っている物を大事に使う、ということが大切です。

次に、ドイツ環境省のティル・ウェバー博士が、ドイツ国内で行っている環境汚染物質の人体汚染状況のモニタリングのデータについてお話してくれました。ドイツ環境省は、ドイツに住む人たちの環境汚染物質へのばく露状況について調査をし（German Environmental Survey=ドイツ環境調査）、調査対象者の生体試料（尿や血液など）を集めてバイオバンク（German Environmental Specimen Bank）に保管し、EU加盟各国が持つコホート調査の結果と比較検討する調査（HBM4EU aligned studies）を行っています。現代生活の中には

汚染物質が満ち溢れており、それらによるさまざまな健康影響が生じていることが報告されていることから、国民の汚染状況と健康状態の調査が行われているのです。

次に、私が、環境汚染がヒトの健康に甚大な被害を起こす典型的な例として「水俣病」の話をしました。私の最も古いテレビの記憶は、水俣病の原因物質、有機水銀によって背中が曲がった魚の映像です。水俣病が起こった熊本県の隣の宮崎県で子供時代を過ごしたので、当時水俣病は頻りにテレビニュースで見聞きしていた事件でした。私は、水俣病の中でも「胎児性水俣病」の患者さんたちに深く同情しました。海産物に含まれていた有機水銀にお母さん経由で暴露されてしまい、生まれた時から水俣病の症状があり、水銀の体内濃度が下がっても、一度被害を受けた体は健康にはなりません。何も悪いことをしていないのに、どうしてこんな影響を受けながら生きていかなければならないのか、と子どもながらに理不尽さを感じていたのです。長じて、環境汚染による人体影響、特に胎児期、小児期の影響について興味を持って研究者の道に進むことになったのも、子どもの頃に感じた理不尽さへの答えを見つけたかったからです。

セッション2のテーマは「最近の健康影響」です。

最初に、シャリテ医科大学の小児アレルギーの専門医であるマヌエル・ペレイラ講師がドイツにおける小児アレルギーの現状とアレルギーを起こさない建物の可能性についてお話されました。ドイツ国内でも花粉症や食物アレルギーが増えているそうで、ペレイラ先生によれば「全アレルギー患者の内、わずか10%しか正しい治療を受けていない（正しく対処されていない）」のだそうです。そして、「花粉症の正しい治療を受けていない子どもの30%は学校でのパフォーマンスが悪く」なり、同様に「40%の子どもが学校の成績が悪くなる」とのことでした。ペレイラ先生は、治療に使われる非ヒスタミン剤の中には、ウイスキーのシングルショット3杯を飲んだのと同程度にパフォーマンス（活動）を悪くするものがある、と面白い表現をしていらっしゃいました。また、現代人は一日の時間の90%を室内で過ごし、アレルゲンの多くが室内に存在するのに、住宅やビルを建設する際や都市計画の際、アレルギーの予防についてほとんど考慮されていないのが現実である、とおっしゃいました。そう言われてみると、たしかにそうです。ペレイラ先生は、「アレルギーフレンドリーな建物」には、床材、内装の壁材を慎重に選び、換気性能を上げ、臭い対策を施すことが重要だ、と訴えます。屋上緑化がはやっていますが、植える植物を慎重に選ばないと、花粉症を悪化させる植物を選んでいる可能性もある、と注意を促します。「アレルギーフレンドリーな建物」という概念はますます重要になってくると思うので、建築界や都市計画の分野の方にもぜひとも知っていただきたいものです。

次に、アメリカ・ジョージワシントン大学のルース・エツェル教授が、「気候変動と健康」についてお話しました。気候変動は環境問題なのですが、人の健康とも密接に関係しています。気候変動により、地球規模で年間の平均気温が上昇しており、それに伴ってこれまで

見られなかった植生の変化や生き物の生息範囲の変化などが起こっています。たとえばアメリカでは、暖かい地方の池や湖に繁殖する有毒な「殺人アメーバ」が温暖化につれて生息域を拡大し、池で遊んだ子どもがアメーバに暴露したことで敗血症を発症し亡くなる、というような事件が増えているそうです。気温の高い地域が拡大することにより、熱帯地方に生息していた動物、昆虫などの生息域が拡大し、感染症を媒介する生き物もそれまで見られなかった地域に広がっています。日本でも、デング熱を媒介する蚊が東京の公園で見つかったことが最近ありました。このようなことはこれからますます増えていくでしょう。また、極端な天候、たとえば熱波、嵐、台風、豪雨の増加などにより、呼吸器系の疾患、精神的な健康被害、ぜんそくなどのアレルギーが増加する、とのことでした。

セッション3は「将来展望」です。

現在、さまざまな環境汚染による健康影響が報告され、研究されていますが、ヒトが健康に生まれ、育つ社会を作っていくためにできることの一つに、長期コホート調査があります。コホート調査の結果から、どうすれば健康影響を生じる環境汚染物質への曝露を避け、健康影響を予防できるかの道筋を立てることが可能になります。このセッションでは、ドイツと日本で行われているコホート調査について紹介してもらいました。

まず、ライプツィヒ大学医学部教授を兼任している、UFZのアナ・ゼンクルッセン教授が、UFZがライプツィヒ市内で実施した「LINA Study (Lifestyle and environmental factors and their Influence on Newborns Allergy risk)」という、環境汚染物質と子どものアレルギーについてのコホート調査を紹介しました。このコホート調査では、妊娠中および出産時に血液や尿などの生体試料を集め、中に存在するさまざまな化学物質を分析・測定し、出生後の子どものアレルギー症状との関連を調べます。参加者たちの自宅の空気を集めて中に含まれる揮発性有機化合物 (VOC) や、カビ、微生物も調べます。さらに、生活や心身の健康に関するアンケート調査をほぼ毎年、子どもが14歳になるまで行います。

さらに、ゼンクルッセン教授は2024年1月から、EUの競争的資金による研究「内分泌かく乱物質や健康に懸念のある化学物質の複合的曝露がどのようにヒトの免疫システムを標的とし、疾患を引き起こすのかを明らかにする (ENDOMIX= Understanding how endocrine disruptors and chemical mixtures of concern target the immune system to trigger or perpetuate disease)」を開始するとのことでした。EUの10の大学や研究所とともに、化学物質のヒトへの健康影響についての研究とその成果を社会に生かすためにどうすればよいかをこれから4年間かけて調査・研究します。4年間で700万ユーロ (約11億5000万円) の予算です。

最後に、当センターの山本緑講師が、「環境省子どもの健康と環境に関する全国調査 (エコチル調査)」の概要と、当センターで行った子どものメディア (テレビやゲームなど) 視聴

時間と発達状況との関連や、化学物質の健康影響についてお話をしました。欧米と日本で行われている複数の環境汚染物質と子どもの健康に関するコホート調査について、データを比較して将来の共同研究につなげるようなことができれば良い、と思います。

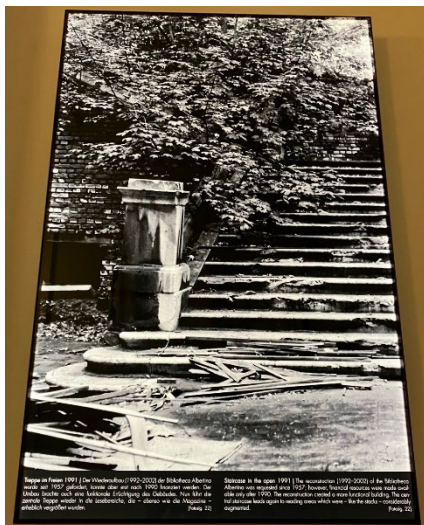
ライプツィヒ市内見学「東西冷戦の記憶とヨーロッパの平和を考える」(11月30日)

ライプツィヒは、第二次世界大戦の際、市街戦が行われたところで、市内各所にいまだに戦鬪の爪痕が残っています。石造りの建物や石畳の道路に激しい銃撃の跡が点々と見られるところもあります(画像6)。言われなければ気づかないでしょうが、ガイドをしてくれた社団法人ライプツィヒ独日協会のペーター・ホイマンさんに詳しく説明されてから見ると、静かで平和な街がにわかに激しい戦鬪の中にあるように想像され、背筋が寒くなりました。この中にいた市民の皆さんはいったいどのような状況に陥ったのだろうか、と。戦後、ライプツィヒは共産主義圏の東ドイツに編入されたため、市民の生活は常に当局に監視され、表現の自由はなく、経済的にも厳しい生活が続きました。

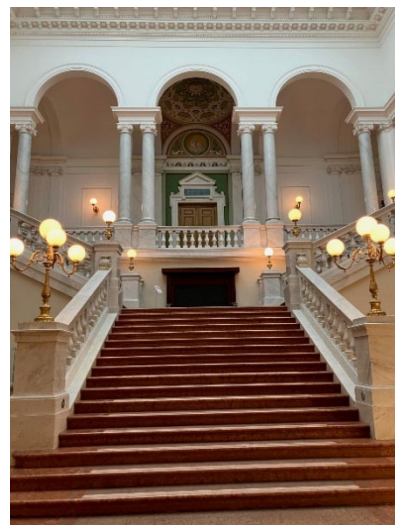


画像6：石畳に残る銃弾の跡

経済が発展しなかったため、戦争中に破壊された建物などの復旧も進まず、爆撃で破壊された大学図書館なども荒れるに任せていたとのことでした(画像7,8)。



画像7：ライプツィヒ大学附属図書館(1991年)



画像8：ライプツィヒ大学附属図書館(現在)

環境汚染対策も進まず、朝洗濯物を干すと夕方には黒く煤だらけになっていたそうです。健康を害する人も多く、ホイマンさんは「子どもをこんなところで育てるのは嫌だ」と思い、1980年代に入ってから徐々に始まった市民による反政府デモに参加するようになったとのことでした。

ライプツィヒは、かつては交通の要衝として栄えた大きな街で、市の中心にある1165年に創建されたニコライ教会は2000人もの人が入れる大きな教会です（画像9）。



画像9：ニコライ教会

この教会で、1982年10月から、毎週月曜日に自由を求める「平和の祈り」が始まりました。そこには政府が秘密警察を送り込んでいましたが、教会の司祭さんはその方たちにも向けて市民の融和と自由のための祈りを捧げました。教会の周りを警察が取り囲み、中にいた人たちは次々にトラックに乗せられて監獄へと運ばれました。しかし、監獄から出されるとまた教会に戻るという具合で、もはや市民の自由を求める情熱は政府にも抑えることはできなくなっていました。1989年10月、ライプツィヒ市民の自由を求める非暴力デモが毎週月曜日に行われるようになり、その数は短期間に数十万人にまで増えました。東ドイツ各地でこのような市民デモが繰り広げられ、西ドイツや国外に逃亡する人が日に日に増加しました。そして11月9日、ベルリンの壁が崩壊します。世界的には「ベルリンの壁崩壊」が知られていますが、ライプツィヒ市民の皆さんは、「ライプツィヒ市民の行動がベルリンの壁を崩壊させた」と誇りを持ってそう言います。

さて、実はライプツィヒには、17世紀に日本に来た外科医がいたのです。その人の名はカスパル・シャムベルゲル（Caspar Schamberger）。1649年から51年まで日本に滞在して外科医として多くの日本人医師に独自の外科術を教えたとのことでした。これはのちに「カスパル流外科術」と呼ばれるようになったのでした。ニコライ教会の目の前に、カスパルが住んでいたお屋敷跡があり、そこにライプツィヒ独日協会のご尽力で、カスパル・シャムベルゲル

ルの居住跡の記念碑がディスプレイされています（画像 10）。しかし、案内してくれたホイマンさんは、「当時、ヨーロッパでは、戦争で多くの人が傷つき、負傷して使えなくなった手足をどうやってうまく切り落とすか、が外科医の技術だったのです。彼が日本で教えたのも、どうやって体の一部を切り落とすか、というような外科術だったでしょう。でも、抗生物質もない時代ですよ。おそらく多くの人が手術後に感染症などで亡くなったと思われま



画像 10：カスパル・シャムベルゲルの記念碑

ライプツィヒには世界的に有名なものがありますが、その中でも有名なのがアウアーバッハスケラーという 500 年の歴史のある居酒屋さんです。かの文豪ゲーテもライプツィヒ大学の法学部に通いながら、この居酒屋にも通ったのだそうです。そして森鷗外もここで何度か友人とお酒を飲んだようです。鷗外の「ドイツ日記」には、詩人の井上哲次郎とここで一緒に飲んでいたところ、井上に「ゲーテの『ファウスト』を漢詩に訳したらどうだ」と言われて、「冗談で『わかった』と言った」とあります。ゲーテの「ファウスト」はドイツ国民なら誰でも知っている長編小説ですが、全文、詩の形式で書かれているそうです。だから、井上は「漢詩に訳したら」と言ったのでしょう。そして帰国後、本当に鷗外は「ファウスト」を詩の形で翻訳しました。当時の文部省からの依頼だったそうですが、軍医として多忙な業務をこなしながらの仕事だったということに驚かされます。

アウアーバッハスケラーは巨大な居酒屋で、壁にたくさんの物語の絵が飾られています。鷗外が井上とここで飲んでいたシーンを再現した壁画が飾られています（画像 11）。若き鷗外と井上が真ん中で飲んでいて、井上が「ファウストを訳せよ」と言い、悪魔メフィストが鷗外に「やってみな、おもしろいぜ」とささやき、後ろでファウストが「やめとけ、後悔するぞ」と渋い顔をしていて、それを後年の鷗外が思い出している、という構図だそうです。多くの日本人がこの壁画の前で食事をするそうで、私たちもここでみんなで一緒に食

事をしました（画像 12）。



画像 11：アウアーバッハスケラーの『森鷗外の壁画』

画像 12：皆でランチ

終わりに

短期間に多くのものを詰め込んだ研修でした。11 月末のドイツは非常に寒さが厳しく、毎日雪が降りました。しかし、ドイツの冬のお楽しみ、クリスマスマーケットの時期にちょうど当たったこともあり、夜になると明るい屋台がたくさん出て温かいグリューワイン（赤ワインにスパイスと砂糖を混ぜた飲み物）を飲んで楽しい思い出をたくさん作ることができたことでしょう（画像 13-15）。また機会がありましたら、ぜひともこのような集中講義、シンポジウムなどを開催して、若い学生たちの将来の選択肢を増やす手伝いをしたいと思います。



画像 13-15：クリスマスマーケットのもよう

文責：戸高恵美子